

2007年1月15日

東京女子大学東寮・体育館についての見解

社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 大野 敏

東京都杉並区善福寺の東京女子大学キャンパス内に建つ東寮・体育館は、1918年（大正7年）に角筈に開学した東京女子大学が1924年（大正13年）にキャンパスを善福寺に移転した際、ともに最初に竣工した建物であり、現在のキャンパスにおいては最も歴史の古い建物である。建物の設計者はチェコ出身のアメリカ人建築家、アントニン・レーモンド（1888-1976年）である。レーモンドは創設者の意向を受け、この善福寺キャンパスの全体計画も担当した。このキャンパスの計画図を見ると、レーモンドはその不整形な敷地形状を巧みに利用して全体を大きく2つのエリアにゾーニングしたことがわかる。すなわち、正門に近く街に開かれた「Education Groups」と称するエリアには、大学のシンボルである図書館や講義室棟、チャペル・講堂などの施設を軸線を強調して配置し（軸線の中央正面には「知」の象徴である図書館を配置）、一方、敷地の奥には「Dormitory Groups」と称して煙突を中心に厨房・食堂や洗濯室などを中央部にまとめ、そこから4棟の寮を放射状に配した建物群を計画した（寮で実現したのは東・西寮の2棟）。これにより、大学の記念性を表現することと、静かで落ち着いた学生の生活環境を確保するという2つの性格の異なる要求を同時に満足させることに成功している。そして、この2つのエリアの接点にライシャワー博士が「体育館兼社交館」と位置づけた体育館が計画された。すなわち、この体育館にはキャンパス内のアイストップとしての役割が期待されていた。

このように、レーモンドのキャンパス計画では、寮や体育館といった学生が日常生活を健全に過ごすための建物群がモニュメンタルな建物群と同様に重視された。これは、この大学がアメリカのプロテスタント諸教派の資金援助を元に建設されたという歴史的経緯や、「日本における近代的な女子高等教育の実現」という創設者の理念を設計者であるレーモンドが深く理解し、その趣旨を建築として巧みに具体化したためと理解できる。また、それゆえに東西の寮と体育館が真っ先に、しかもまだ日本に導入されて間もない鉄筋コンクリート造で建設されたと考えられる。以上のように、現存する東寮・体育館は、建学の理念とそれを具体化した善福寺キャンパスの設計趣旨を将来に語り伝えていく上で、ともに不可欠な建物と言える。そして、建築史的・技術史的な視点からは、以下に詳述する2点においても極めて高い価値を認めることができる。

1. 初期のレーモンドの作風に見られる多様なデザイン手法を展開した作品の好例

東京女子大学の善福寺キャンパスには、東西寮と体育館（1924年）が建設されたのを皮切りに、外人教師館（1924年）、安井記念館（1925年）、東校舎（1927年）、ライシャワー館（1927年）、図書館（1931年）、講堂兼礼拝堂（1934年）といった建物が、いずれもレ

レーモンドの設計によって次々と建設された。レーモンドはこれら諸施設をデザインするに当たり、様式を統一するのではなく、むしろ多様な様式を自由に折衷して適用したが、これは独立後間もない時期のレーモンドの作風をよく示している。具体的には、外人教師館や図書館では外観の基本的な構成を F.L.ライト風の意匠（軒の出や縦長のガラス窓で垂直・水平線を強調した立面構成）としつつ、細部にはアール・デコ風のステンドグラス（図書館）やチェコ・キュビズム風の装飾（外人教師館）を用いている。また、礼拝堂がオーギュスト・ペレー（1874-1954年）のノートルダム・デュ・ランシー教会（1923年）を強く意識したデザインであることはよく知られている。

こうした傾向は東寮において、特に外観立面の扱いに見ることができ、具体的には煙突の断面を八角形にしてその稜線を強調する点や、壁面の方立てを五角形断面にして垂直の稜線を強調している点に、チェコ・キュビズムの手法を見ることができる。これは同時代の日本人建築家には見られない、当時のレーモンドが得意としたデザイン手法という点で注目される。

一方、体育館については、ライシャワー博士がこの建物を「体育館兼社交館」と位置づけたことから、設計者には大空間を確保しつつ建物に品格を与えることと威圧的なヴォリュームを消すことが要求されたと考えられる。ここでレーモンドは、両端部の二階屋を軽く前に張り出し中央部にエントランスを設けてファサードに左右対称の安定感を与えるとともに、大屋根の高さを極力抑えるため、床高を下げてホールの天井高を確保している。意匠的には、外観において外壁に柱型を見せず、壁面に大きな開口部を取るなど近代主義的なデザインで質実にまとめつつ、一方、内部の柱型や梁型にはややクラシックなフルーティングを付けるなど、社交館としての賑やかな雰囲気を醸し出すことを試みている。

2. 鉄筋コンクリート構造に対する的確な理解とそれを造形化する卓越したデザイン力
レーモンドは日本の建築界において、関東大震災の前から鉄筋コンクリート造に意欲的に取り組んできた建築家として知られ、ほぼ同時期に建設された星商業学校（現・星薬科大学）の講堂（1924年）や霊南坂の自邸（1924年）も鉄筋コンクリート造で設計された。前者の長大なスロープや後者の打ち放しコンクリートなど、いずれも鉄筋コンクリート造の特徴をデザインに活かした点が注目されるが、レーモンドはチェコのプラハ工科大学においてきちんと構造技術を学んでおり、これらのデザインは構造力学に対する的確な理解に基づいてなされたと考えられる。これらの作品に共通してみられる、当時の日本人建築家の理解を超越した鉄筋コンクリート構造に対する理解と自由な発想は、東寮と体育館においても以下のような点に見ることができる。

既に取り壊された西寮の写真などから判断する限り、東寮は鉄筋コンクリートのラーメン構造を基本としつつ、2階の屋根・天井にはスラブを打たず（軒先のみスラブ打ち）、1階の床にスラブを打ち、さらに2階の床には蒲鉾型の金属板を型枠兼用にしたスラブを打つという、当時の日本では一般的ではない方法が取られた。1・2階の床スラブをコンクリート造とした理由は、この建物が土足で使用されるため遮音性を考慮したものと考えられ、また軒先以外の屋根スラブを打たなかった理由は、経済性とともな耐震性に配慮し、屋根荷重を軽減したものと考えられる。この軒先の底スラブは立面意匠を引き締めるのに効果的な役割を果たしている。東寮は竣工間際に関東大震災に襲われたが、被害はほとんどな

かったとレーモンドが証言していることから見て、これらの工夫は耐震的にも有効であった可能性が高い。

一方、体育館（兼社交館）の構造形式では、大空間を支えつつ同時に十分な採光を確保し、また軽快・瀟洒な室内意匠にもなるような工夫が求められた。レーモンドはここで梁の形を工夫して「A」形、すなわち切妻屋根の登り梁とその中段の繋ぎ梁からなる梁の形式を考案し、繋ぎ梁の上端レベルに天井を張ることで、室内意匠としては腰折形のアーチに見える構造形式を考案した。そして水平荷重は主に屋根スラブと正面側の庇スラブに負担させ、ダブルコアに見立てた両端部の二階屋で支えたと考えられる。桁行方向の壁面では、天井ぎりぎりまで大きな開口部を取るために桁の見付寸法が極力抑えられた。これらの工夫によって室内は明るく開放的になり、また腰折れ形の天井を象るように梁のフレームが規則的に並ぶ、あたかも鉄骨造のような軽快な大空間を生み出すことに成功している。